

## 主 論 文 要 旨

No.1

報告番号	甲 乙 第	号	氏 名	鈴木 慶孝
主 論 文 題 名 :				
現代トルコの政治社会変動 ——民主化、イスラーム復興、ナショナリズムの政治社会学的考察——				
<p>本論の目的は、多民族帝国から国民国家へと移行し、その領域本来の民族的・宗教的多様性ゆえに、国民社会に亀裂がもたらされているトルコ共和国の国民的連帯・統合の展望と課題を、トルコ独自の概念・制度の考察を通じて浮き彫りにすることである。</p> <p><b>序：</b>研究背景と目的、先行研究とその課題、そして本論の論文構成を説明している。</p> <p><b>第1章：</b>トルコ共和国は、近代的な国民国家を創造するために、建国の父であるムスタファ・ケマル・アタテュルクの指導によって、様々な改革と政策を導入してきた。それらは脱イスラーム化をともし西洋近代化改革として一般的には認識されている。だが西洋諸国と同様にトルコも、国家と宗教の分離、公的空間の宗教的中立性、宗教と良心の自由が達成されていない。イスラームは首相府宗務庁の管轄下におかれたが、これにより私的・公的領域のイスラーム活動は国家によって厳しく統制、管理された。宗務庁以外の宗教活動は法で禁じられたことから、宗教や良心の自由が制限される事態を生み出している。加えて公式の国民概念は、多民族性を前提としており、人種や宗教の違いを考慮せずに、あらゆる諸民族は、平等な権利と自由を有する「トルコ人」、「トルコ国民」とされている。公式マイノリティは非ムスリムのみである。本論はこのシヴィックな統治理念を「ケマリスト・ナショナリズム」とした。しかし実際にトルコ国家が追求してきたのは、主に「中央アジア起源のトルコ民族」を醸成するための政策であり、多様な出自をもつ国民が「トルコ民族」、「スンニ派」と重複するよう画策してきた。これを「トルコ・ナショナリズム」という。つまりトルコは、二つのナショナリズムとこれに依拠する統治理念が競合してきた。この国民概念と諸政策の矛盾に疑念をもつ者は、弾圧・周辺化の対象であり続けてきた。多様性を内包しつつ、内的な単一性を推進するという国民国家の矛盾を、トルコもまた建国当初から抱え込むこととなった。</p> <p><b>第2章：</b>1980年代以降、トルコの国民概念、ナショナル・アイデンティティーは、「トルコ・イスラーム総合」政策によって、よりトルコ化、公定イスラーム化された。原因は社会の混乱である。一党制の終焉と複数政党制の導入、急速な都市化・民主化を受ける形で、様々なイデオロギー、アイデンティティー集団が台頭、衝突したことにより、トルコは80年までにアナーキー状態に陥った。この間、秩序回復を目指した軍事クーデターが度々発生したことが事態の深刻さを表している。トルコは、できうる限り</p>				

イスラーム的諸価値を抑制してきた。しかしこうした事態を受け、トルコ国家はイスラームを道徳心と国民の間の凝集性として機能させるべく、トルコ民族の諸価値が反映された「トルコ・イスラーム総合」政策を採用し、イスラームは義務教育化された。しかしこの政策が、特定の民族や宗教宗派に特権的地位を付与しないはずの国民概念に、さらなる矛盾と軋轢を生み出した。以降、国民の間の分断がより拡大していくこととなる。

**第3章：**トルコの政教関係は、首相府宗務庁が担っている。主な活動目的は、憲法に明記された「国民的連帯と統合」の実践である。宗務庁は1980年代以降、政治・社会・教育分野に関与していった。トルコでは、宗務庁のイスラーム活動や理解のみが正当性を獲得できる。それゆえに、非国家的・異端的であると判断されるアクターがイスラーム活動を担い、トルコ社会で影響力を拡大することは、国家不可分性、公共秩序、一般道徳、宗教の政治利用の名の下で禁じられている。加えて宗務庁は、トルコ・ナショナリズムを補強する、トルコ民族の諸価値が反映されたトルコ・イスラームの創造、普及にも努めており、国民概念とナショナル・アイデンティティーのトルコ化も担っている。宗務庁は独自の論理によってその存在に正当性が付与されているが、それは端的にトルコが事実上の「スンニ派ムスリム社会」であることを前提としたものである。「世俗国家」トルコで、政治的事象に関与し、宗教や良心の自由にも介入する宗務庁の存在は、現在も批判の対象であり続けている。こうした宗務庁の機能的役割からも、トルコ・イスラーム総合に依拠したトルコ・ナショナリズムは強化、拡充されている。

**第4章：**トルコには「アレヴィー」と呼ばれる、独自の礼拝場と実践を有する非スンニ派のマイノリティー集団が存在している。しかし公式マイノリティーは非ムスリムだけのため、彼らは「マイノリティー」とは認定されていない。彼らは、宗務庁やスンニ派を中心とした宗教の義務教育化を同化政策だと見做して反対し、スンニ派と同等の地位を求めている。トルコ国家は、アレヴィーが「中央アジアのトルコ民族に連なる伝統、文化、実践」であるとして、彼らを包摂しようと試みているが、こうした主張に自己同定できるアレヴィーは一部のみである。アレヴィーは内的に多様で、その実践や起源にも様々な解釈があり、クルド人アレヴィーも存在する。国家権力にとって、彼らの要請の実現とは共和国が講じてきた政策の否定・転換を意味することから極めて難しく、宗務庁も彼らの要望を積極的に承認していない。アレヴィーが公式に認知されるには、既存の宗務庁を頂点とするスンニ派社会への編入か、その秩序の解体を目指さねばならない。現状では内的差異を問わず、彼らはスンニ派と既存システムに服従せざるを得ない。

**第5章：**国家権力側にとって国民的連帯と統合に対する最大の障害はクルド人である。クルド地域の経済発展を求めた穏健で民主的な運動は、80年代以降、過激な分離独立

運動へと変貌した。武力衝突のなかでクルド人居住地は荒廃し、大量の国内避難民が生み出された。政府による救済策も部分的であり、彼らの多くは帰村することもできず、都市部で社会経済的な排除を経験している。現在、分離独立を主導してきたクルド労働者党やクルド系政党も、「トルコ・イスラーム総合」や宗務庁を廃止することを求め、トルコが民主化されることでクルド人の権利が承認されることを主張しているが、いずれの主張も共和国が構築してきた制度や概念の崩壊を示すものである。そのために、クルド人は今後も、既に平等な権利と自由が付与された「トルコ人」、「トルコ国民」であるという従来の立場に留めおかざるを得ないのが現状である。

**第6章：**トルコで政治的、社会的影響力を有する最大のイスラーム運動は、宗務庁の元役人であったフェトフッラー・ギュレンを精神的支柱とする「ギュレン運動」であり、民主主義と多様性の是認、異宗教間対話の促進を掲げている。しかしその影響力の高さと不透明な組織構造ゆえに、国家権力、宗務庁から敵視されている。一方で、ギュレンはナショナリストとしても評価されてきた。彼の思想と既存の国民概念・ナショナル・アイデンティティーは親和性が高い。彼は愛と寛容の根源としてトルコ・イスラームを称揚し、中央アジアに連なるトルコ民族の諸価値を称賛してきた。彼は民族的諸価値を危機にさらす者に寛容であってはならないと主張する。ギュレン運動は自国民を他者化する可能性がある。彼らが多様性の承認に真に貢献するには、トルコ民族をマジョリティーとして機能させているトルコ・ナショナリズムの再考に与することが必要である。

**第7章：**現代トルコを率いる公正発展党(AKP)やエルドアン大統領もトルコ・ナショナリズムを否定し、トルコが多民族国家であるとしてきた。AKP 政権は立て続けの民主化改革を行い、アレヴィーやクルド勢力との対話も重ねてきた。だが近年、民主化改革は鳴りを潜め、強権主義的な態度が常態化し、クルド武装勢力によるテロも頻発している。対話によるクルド問題の解決は遠ざかっている。同政権下では、トルコ国民の性質を示す「トルコ性」に関する議論も行われた。主要政党側は、それは「トルコ民族」を指すものではなく、あらゆる諸民族を包摂した「トルコ国民」を指すものだと主張し、クルド政党から多くの反発を招いた。こうしたトルコ国家・政権側の、国民概念の内実に対する誤魔化しが続く限り、真の国民的連帯と統合は果たされないだろう。

**終章：**多様性と国家不可分性の間で揺れるトルコだが、国民の間の分断を解消するために重要なのは、スンニ派トルコ民族に占有された国民概念やナショナル・アイデンティティーとこれらを支える制度の再考であり、諸民族・諸宗教宗派を考慮したうえでの再構成である。国民をまとめ上げる新たな概念・制度を俎上に載せるために、「平等なトルコ国民」という欺瞞と矛盾を理解し、乗り越えることが何よりも重要なのである。